

岡村病院

岡村 高雄院長（心臓血管外科医）  
浜田 佐智子技師（血管診療技師）



岡村高雄院長



浜田佐智子技師

# 血管検査で疾患早期発見

下肢血行障害の患者さんを診断する基本は、脈を取ってみて触れるかどうかです。

脈が触れるかどうかは、足の甲を流れる血管（足背動脈）と内側のくるぶしの外を流れる血管（後脛骨動脈）で脈を取ることと比較的に診断できます。これは家庭でも手軽にできる触診法です。二つの動脈のどちらかで脈を感じられれば、重篤な足の疾患に至る可能性は極めて低くなります。

最近、それに代わるものとして普及しつつあるのが、左右の腕と左右の足首の計4カ所の血圧を同時に測る方法です。動脈閉塞（へいそく）を早期発見できるだけでなく、動脈硬化の程度を評価できることも特長として挙げられます。

人間の足の血圧は基本的に腕の血圧と等しいか、それよりも高いのが普通です。足の血圧が腕の血圧の0・9以下の人は足の血流障害が疑われ、さらに心臓や心血管系の病気で亡くなるリスクが3～6倍に増大すると報告されています。50歳以上で

糖尿病か喫煙歴のある人、歩行時に下肢の痛みを訴える人、高血圧や高脂血症などがなくても70歳以上のすべての人はこの方法で血圧を測定するべきだと考えられています。

この検査では血管の硬さを測定することも可能です。この方法で測定した動脈硬化の程度と、頸（けい）動脈の血管の壁の厚さとは密接な比例関係にありますし、高血圧・耐糖能異常・高脂血症・肥満などのリスクが多ければ多いほど、血管の硬さが上昇することが分かっています。

この検査を受けることで、早い段階から動脈硬化の程度を把握することができます。

血管検査の中で信頼ある検査方法の一つとして挙げられるのが超音波検査です。手軽で、患者さんの身体的負担がとてもなく、副作用がない上、ほかのCT（コンピュータ断層撮影）や血管造影に比べて繰り返し検査できるなどの利点が認められています。ただ、超音波検査をするには知識と経験が必要で、検査結果が患者さんの治療方針に影響を及ぼす場合もあり、結果に対する十分な信頼性が求められます。

ここ数年、血管疾患を抱える患者さんの増加とともに、検査に携わる臨床検査技師の育成が急務となっています。さらに習熟した技師を育成しようと、2006年に血管診療技師認定機構が発足し、本院の職員も県内初の「血管診療技師」に認定され、現場で活躍しています。

## 動脈硬化の把握も可能